

社会情動的スキル^{*1}にも着目し、客観的データに基づく個別支援を強化

東京都 ^{ふっさ}福生市教育委員会 教育長 川越孝洋

東京都福生市は、小規模で児童・生徒数が少ないという特徴を強みとし、子ども一人ひとりの実態把握に力を入れている。データを基にした教員との対話を重視して、子どもの成長を支えていきたいと、川越孝洋教育長は語る。

かわごえ・たかひろ 東京都公立中学校教諭を経て、福生市教育委員会参事兼指導室長、多摩市立落合中学校校長等を歴任。2013年1月から現職。



平均値で捉えずに一人ひとりの実態に注目する

教育による人づくりは、持続的に発展するまちづくりの礎であり、未来への投資です。そうした考えの下、本市では「子どもの『生きる力』の育成と個を伸ばす教育の充実」を基本方針の1つに掲げています。その実現に向け、とりわけ重視していることが2つあります。

1つは、客観的データに基づく一人ひとりの子どもの実態把握です。様々な学力調査や意識調査が行われていますが、多くの場合、注目されるのはデータの平均値です。本市でも、市や学校の平均値を、全国や都の平均値と比較して課題を見だし、施策立案や指導改善を行ってきました。しかし、集団の実態を捉えるだけでは、子ども一人ひとりの成長過程に適した支援は十分に行えません。さらに、本市の場合、子どもの自己肯定感が低いことが分かっています。そのため、全国平均と比較した順位を気にするだけでは、子どもの成長を促すことはできないと考えました。

もう1つは、社会情動的スキルの

育成です。新学習指導要領で「学びに向かう力・人間性等」の育成が掲げられたように、最後までやり抜く力や自己調整能力などの社会情動的スキルは、基礎的な知識・技能などの認知能力の土台になるものとして注目されています。社会情動的スキルは、幼児期から小学校低学年にかけての育成が効果的といった研究成果も複数報告されており、そうであれば幼稚園・保育所と小学校が連携して教育を行うことが一層重要になります。以前は認知的な学力の向上を第1の目的として指導改善に注力してきましたが、それとは異なる視点も必要になると、認識を改めたのです。

認知能力・社会情動的スキルの客観的データを活用

本市は、市立小・中学校数が全部で10校と小規模であり、子どもの丁寧な実態把握が可能で、そこで、認知能力と社会情動的スキルをデータ化して関連づけることで、一人ひとりに着目した質の高い教育を実現させようと、新たな取り組みを始めました。

認知能力については、2020年度から、小学2年生～中学3年生でベネッ

セの「総合学力調査」を年1回実施し、教科学力と学習意識を調査します。教員・子ども・保護者が実感を持って受け止められるよう、データの提示の仕方を工夫するとともに、成長やつまづきを、学年や校種を超えて把握し、個々の課題に対応した学習機会を提供する予定です。

社会情動的スキルについては、就学前後の教育のより円滑な接続を目指し、東京都教育委員会の研究指定を受け、慶應義塾大学と連携した実践研究を行います。各園の教育環境の観察や保護者・教職員へのアンケート調査です。本人による回答が困難な幼児調査は、幼児の行動を○×で記録する見取りによる調査、小学校での学力との相関など、5～7歳の3年間を追跡します。小・中でデータ化を進めている内容を拡大し、幼・保・小・中とデータを蓄積していきます。

それらの客観的データを基にすれば、効果の上がる学習集団として工夫改善の視点が分かりやすくなるのではないかと期待しています。今後は、教員個々の指導観に客観的データを加えることでますます重要となる主体的・対話的で深い学びを行う

のに適した、親和性のある学級編制が可能になると考えています。

不登校の子どもを継続的に支える仕組みを確立

2020年度には、不登校の生徒を支援する「不登校特例校分教室」を、3校ある中学校のうちの1校に設置しました。本市では2014年度から、不登校及び不登校傾向にある児童・生徒の指導記録を「個別支援カルテ」にまとめ、それを基に臨床心理士やスクールソーシャルワーカーも交え、継続的に支援しています。本教室では、その取り組みを一歩進め、子どもの考えや生き方をカウンセリングし、学校復帰のみを目指すのではなく、社会的自立に向けた支援をしていきます。

そのためには、一人ひとりの状況に応じて異なる最適な学びを、ICTを活用して提供することが、1つの鍵になると考えています。データ分析

や指導記録の蓄積はもちろん、学校を離れている間でも個別にコミュニケーションを図ったり、学習を進めたりすることも可能です。本教室の生徒にはタブレット端末を1人1台ずつ貸与し、ICTソフトの「ミライシート」^{*2}を活用して、家庭でも自分に合った学習を進められるようにしました。

そこで得た知見は、文部科学省の「GIGAスクール構想」を受けて加速している義務教育全体でのICT活用に生かしていきます。施設・設備の整備だけでなく、それを十分に活用するためのソフト面の充実にも力を入れていく考えです。

エビデンスと丁寧な対話で施策への理解を浸透させる

施策の推進にあたっては、客観的データなどのエビデンスを基に、丁寧な説明を心がけています。子どもの実態を客観的に示すと、議会も学校教

育に何が必要かを理解し、強力な応援団となってくれます。幼・保・小の連携では、私も市内の幼稚園と保育所を訪れ、子どもの実態を自分の目で確かめ、教職員に直接、施策を説明しました。新しい施策は成果を継続して出すことが難しいですが、教育委員会と学校が納得し合って取り組めば、施策が現場に浸透し、効果を生み、さらなる改善につながると考えます。

私が先生方にお伝えしているのは、今や子どもが学校に合わせるのではなく、学校が子どもに合わせる時代になったということです。それは、教員が子どもにおもねるという意味ではありません。社会も子どもも多様化が進み、それぞれの価値を認める重要性が高まる中、目に見えにくい教員の経験と、それを裏打ちして新たな意味を与えるエビデンスの両方を生かして、子ども一人ひとりの成長を支えていきたいと思っています。

東京都福生市プロフィール

◎武蔵野台地の西端にあり、都心から西へ約40kmの場所に位置する。多摩川や玉川上水、南北を貫く2本の崖線によって、豊かな自然が広がる一方、昭和40年代からベッドタウンとして発展を遂げてきた。地域の約3分の1が在日アメリカ空軍横田基地に利用されている。人口 約5万8,000人 面積 約10.16km² 市立学校数 小学校7校、中学校3校 児童・生徒数 約3,400人 電話 042-551-1511 (代表) URL <https://www.city.fussa.tokyo.jp/education/>

*1 一貫した思考・感情・行動のパターンに発現し、学校教育または学校教育外でも学習体験によって発達させることができ、個人の一生を通じて社会・経済的成果に重要な影響を与えるような個人の能力。忍耐力、自己抑制、目標への情熱、社会性、敬意、思いやり、自尊心、楽観性、自信など。

*2 協働学習、一斉学習、個別学習それぞれの学習場面で活用できる複数のアプリケーションで構成された、ベネッセのタブレット学習プラットフォーム。